

木鱒岐豆之 狀似鱒而小、鱗大二三寸、夏月出有、雜肴中、其肉不柔、最下品、

〔後水尾院當時年中行事下〕一まゐらざるものは、中このしろ、

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等、刺史執鞭之圖也、中常擔集諸國土產貯甚豐也、所謂中伊勢鱒、

〔出雲風土記島根郡〕凡南入海所在雜物、中近志呂、中海松等之類至多、不可盡名、

〔萬葉集十七〕思放逸、應夢見、感悅作歌一首并短歌、中

乎登賣良我伊米爾都具良久奈我古敷流曾能保追多加波麻都太要乃波麻由伎具良之都奈之等

流比美乃江過底多古能之麻等比多毛登保里、中

右守中越 大伴宿禰家持、九月中天平二十六年二十六日作也、

〔萬葉集略解十七〕このまろを、遠江人はつなしといへりとぞ、このしろの一名なるべし、

〔慈元抄上〕問曰、歌故に幸に逢たる人ありや、答曰、昔有馬の王子零ぶれ給て、下野國まで下り給、其

國五万長者とて富人あり、其に立寄せ玉ひて奉公すべき由を宣ふ、長者奉置、中其比長者獨の

娘を持ちたり、かねては常陸の國司に參すべきよし、約束有ければ、彼王子忍逢給ひて、無程懷妊有

ければ、國司より催促ありけれど、娘は早死したりして、喪葬の儀式をなして野邊に送る、棺に

はつなしと云魚を入れて、焼て烟を立、彼魚の焼匂ひ、人を焼に似たればなり、其心を讀る、

東路の室のやしみに立煙たが子のしろにつなし焼らん、このかはりに焼とよめり、それより

してこのしろと云となむ、

〔塵塚談下〕河豚鱒魚我等、中小川顯道、若年の頃は、武家は決して食せざりしもの也、鱒魚は此城を食

といふひびきを忌て也、中鱒魚は今世も士人以上は喰はざれども、魚鮮にして士人も婦人も

賞翫しくらふ、

〔運歩色葉集魚名〕鱒、